

イマドキの 野生動物

宮崎 学

Miyazaki Manabu
Wild Animals Now



2021 8.24^[火]—10.31^[日]

東京都写真美術館
TOKYO PHOTOGRAPHIC ART MUSEUM

2階展示室

【主催】公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館 【後援】信濃毎日新聞社 【協賛】ニコン／ニコ
ンイメージングジャパン／東京都写真美術館支援会員 【協力】モンベル 【開館時間】10:00-18:00（入館は
閉館の30分前まで）【休館日】毎週月曜日（月曜日が祝休日の場合は開館し、翌平日休館）【観覧料】一般
700円／学生 560円／中高生・65歳以上 350円 ○小学生以下及び都内在住・在学の中学生、障害者手帳をお持ち
の方とその介護者（2名まで）は無料。○本展はオンラインによる日時指定予約を推奨いたします。詳しくは、
当館ホームページをご参照ください。

恵比寿ガーデンプレイス内

TOP MUSEUM

THE FUTURE IS ART
文化でつながる。未来をつなげる。

Tokyo Tokyo
FESTIVAL

《テン》2017年 作家蔵

東京写真美術館では、「宮崎学 イマドキの野生動物」を開催いたします。

宮崎学(1949-)は中央アルプスの麓、長野県上伊那郡南向村(現・中川村)に生まれ、伊那谷の自然豊かな環境を活かし、1972年よりフリーの写真家として活動を開始しました。「自然界の報道写真家」として、現在も日本中の自然を観察しています。

宮崎は動物たちの通り道に自作の赤外線センサー付きのロボットカメラを設置し、撮影困難な野生の姿を撮影した「けもの道」のシリーズなど、哺乳類、猛禽類の撮影において独自の分野を開拓してきました。また、人間の生活空間近くに出没する野生動物や、外来動物の影響など、動物の生態を通して人間社会を浮き上がらせる社会性のあるテーマにも取り組んでいます。

シリーズ最新作となる「新・アニマルアイズ」では、「動物たちの住む森を動物の目線で見る」をコンセプトに、動物たちの痕跡を注意深く読み解き、自作のロボットカメラで人間の目が及ばない世界をみごとに写し出しています。本展覧会は、半世紀近くにわたる宮崎の作家活動の軌跡をたどりながら、黙して語らぬ自然の姿を浮き彫りにしようとするものです。どうぞご期待ください。



シリーズ《死》より《冬・ニホンジカ》1993年 *

宮崎学が読み解く 「森の事件簿」



《ツキノワグマのカメラマン、長野県、中央アルプス》2006年



《クマタカ》1972年 *



《フクロウのヒナ》1988年 *



シリーズ《死を食べる》より《ニホンジカを食べるイノシシ、岡山県》2012年



《ニホンカモシカ》1971年



《ムササビ》2016年



《洗剤キャップを背負ったヤドカリ、鹿児島県》1995年



《鶴岡八幡宮のタイワンリス、神奈川県》2000年



《ニホンザル》2020年

* 印は東京都写真美術館蔵、それ以外は全て作家蔵



撮影：飯塚 淳

宮崎 学(みやざき・まなぶ 1949-)

1949年長野県生まれ。自然と人間をテーマに、社会的視点にたった「自然界の報道写真家」として活動。「けもの道」を中心とした哺乳類及び猛禽類の撮影では自作の自動撮影カメラを駆使し、独自の分野を開拓する。近年では日本各地で問題となっている獣害対策のアドバイザーとしても活躍。1978年『ふくろう』で第1回絵本にっぽん大賞、1982年『鷲と鷹』で日本写真協会新人賞、1990年『フクロウ』で第9回土門拳賞、1995年『死』で日本写真協会年度賞、『アニマル黙示録』で講談社出版文化賞を受賞。他、写真集、著書多数。

関連事業

会期中に関連事業を開催する予定です。最新情報は当館ホームページをご参照ください。

※事業は諸般の事情により、変更することがございます。
最新情報は当館ホームページでご確認ください。

www.topmuseum.jp

TOP MUSEUM



〒153-0062 東京都目黒区三田1-13-3 Tel.03-3280-0099
JR恵比寿駅東口より徒歩約7分、東京メトロ日比谷線恵比寿駅より徒歩約10分。
当館には駐車場はありません。近隣の有料駐車場をご利用ください。
恵比寿ガーデンプレイス内